

第20回関西学院歴史サロン (二〇〇八・一一・一四)

演題 学院史編纂室三〇周年を迎えて ―なぜ学院史編纂が必要なのか―

講師 山本 栄一

司会 永田雄次郎

永田 本日はお集まりいただきましてありがとうございます。

今日は記念すべき第二〇回関西学院歴史サロンを開催したいと思えます。今回は関西学院名誉教授でいらっしやいます山本栄一先生をお招きいたしまして、学院史編纂室三〇周年を迎えて「なぜ学院史編纂が必要なのか」という題でお話いただきます。あらためて紹介するまでもありませんが、先生は一九九六年から二〇〇五年までこの学院史編纂室の室長をされ、『関西学院百年史』そして『関西学院事典』の編纂にも携わっておられました。本当に学院史編纂室についてはよくご存知の先生でございます。今年三〇周年を迎えた編纂室はこれをひとつの区切りとして、今後をどう考えるかという問題についてお話をうかがいた

と思います。先生、よろしくお願いいたします。

山本

はじめに―学院史編纂室三〇周年を迎えて

私、この春に定年退職いたしましたもう何ヶ月ですか、もう遠い昔のような気がいたします。今は秋学期に週に一度だけ大学院の授業に來ています。学校は、これから学部が増えていって校舎も建って、そのうちにいちだんと見違えるだろうなと思っております。ちょうど今年が、学院史編纂室、これはもともと学院史資料室で始まったもので三〇周年を迎えられるということです。それを節目に何

か話をしてほしいということでしたので、私は、学院史編纂室がどういふものであつたかという話をここでしてもあまり面白くないし、作ってもらつた後掲の参考資料(1)(2)が手元にありますので、それを見ていただいたらかなりいろんなことがあつて、三〇年という歴史があるということはお分かりいただけだと思います。それで「なぜ学院史編纂という必要があるか」ということをお話してみました。

もうちよつといひますと、学院史といつたものは作らなくともいいわけです。後でふれますが、ずっと昔には作られたが、最近は何も作っていないとか、また一度も作っていない学校もあるのではないかと思ひます。もちろん歴史の新しいところも当然あつて、今後作られるような学校もあると思ひます。現在学校教育がおかれてゐる状況で、学院史編纂ということのもつてゐる意味は回顧趣味であるとか、学校はそういうものを作れば格が高くなるとか、見映えがよくなるとか、余計なことを考えるようにも見受けられます。お金も掛かりますし、そういうことをやる意味は何なのか。かつて私が考へてゐた学院史という学校史を書くということの意味は、現在では非常に違う点があつたと思ひてきました。

一 現代の教育がおかれてゐる状況

なぜそういうふうになつたかといふと、『関西学院百年史』の前に『経済学部五十年史』の編纂に参加しました。学部史といふのも大変なものです。三年ぐらひかけて作つたのですが、まったくゼロから始めて、しかも学院史がまだ書かれてゐない時代もやつたわけで、一学部について千頁くらいのかつぱり詳細な学部史を作りました。そのときから二〇年経ちまして、『七十年史』を作ることになりました。私とそこにおられる井上琢智経済学部教授とで、本文を半分ずつ書いたのですが、その時期は大学がおかれてゐる環境が変わつてきた時代だったので。最初にその話をしてみたいと思ひます。

学院史のようなものを編纂することに意味があるのかということですが、現代の教育のおかれてゐる状況といふのは、効率的な学校運営がなされてゐるのか、きちんとお金を使つて成果を上げてゐるかとか、計量的に測つてみてこの学校はどれくらいの評価点数が採れるか、そういうことにとつても関心を向けさせられてゐるんです。たとえば「関関同立」といふ言葉があつて、上の「関」は関学なのか関大なのか、順番からだつと立命館が一番下だとか勝手に

言っていたことであって、ほんとうはそれは四校が「一体」であることを示していたはずですが、関学もかつては関西の雄たる学校でと言っていたけれども、ある時から学長が「どんどんと下がってきた」と言ってきたんであって私はぜんぜんそんなふうには思っていないませんでした。なぜそう思わなかったかということをお話します。

今は、一番は誰で、二番は誰で、点数で一番、二番、三番を決める。そういうとすぐにわかるんですが、学校がそんなふうな方向で評価されるように仕向けられてしまっている時代になったんだと思います。以前にもある程度ありましたが、こんなにはつきりしたものはなかったと思います。

義務教育についても、最近学力テストをすると大阪府は全国の最低にあるとか、結局は点数ですね、大阪の子どもは全部低いように思われているむきがあります。あの議論をすることが非常に有効なことなのか。大阪府知事は順位を上げることがいい教育になると言っていますが、よく考えてみても「いい教育」などというものは簡単に学力テストの点数を上げることで出来ることなのか。それほどまでに教育ということをし、一面的にしかみないというのは何かどこおかしいですね。そういうふうには思ってきました。

中等教育についても、同じようなことがあります。私は、公立の学校に行きましたので、どこの学校に何人入ったとかという進学率、個別の学校選択、どこの高等学校へ進学したか、さらに高等学校から国立大学に何人入ったのかといったことです。結局、上級学校へ進み、こういう成績を採った学校はいい学校であるとか、そして大学ではもっぱらランキングです。世界のランキングに日本は何校しか入っていないという。関西学院は影も形もないとか、そういう自分の学校の評価ばかりに目を向けていたら、「教育とは何なんだろうか」と思うはずなのですが、それがかなりの比重をもってそれぞれの学校を縛りはじめたのです。

共通一次試験が行われ始めた時から偏差値というものが一般化し、そのために偏差値評価が広まり、最近はその現象で余裕をもって大学に入ることが出来る事で少し改善してきたかも知れませんが、各大学の上下差をはかるという傾向が強いですね。

こういう時代で、一方では経済人は役に立つ学校を作ってほしいと思います。私は、日本の経済人、経営者というのはやはり悪いけれども粒は小さいと思います。大学出で会社に「役に立つ」人間がいると「いい会社になる」と思っておられるのは大間違いではないのかと思うのです。真剣

にそう思っておられるから仕方がないのですが、今の経団連会長御手洗さんの『日経新聞』の「私の履歴書」を読んだ時、彼は国際性のある懐の深い方だと思いました。ところが、会長になられてからの発言には、残念ですが経済のことしか、今役立つことしか言わない。大学に関してもしかるべき方はそうでもないかもしれませんが、目立った発言をしておられる方はみなそうです。

大学は昔から役に立たないといわれ、役に立つ人材を育てなかったと言ってきたのです。「大学は即戦力を備えるような学校になる」ということには、ある時期までは抵抗していたと思います。それは「大学の任務ではない」と。「働くようになってから具体的な職業教育をしていくので、学校というところは職業教育の場ではない」、実業学校ではないのだから。工学部であるうが、同じように考えられていたのであって、「重要なのは基礎教育だ」と。もう少し言うなら、私は、「大学教育はリベラル・アーツだ」と言うべきだと思います。

そんなに大学に期待していないのかと思っていいたら、依然として大学を卒業した人を如何に入社させるかということが採用試験の一番大きな問題だということです。やはり大學生を信用しているのだと思うんです。自分の会社に好み

の・相応しい・人の言うことを良く聞く社員を育てるということ、こういうことはダメだと言っていたのに、それを再生産しています。なぜ大学新卒の新人社員を入社させることに各会社は血道を上げるのか、大学教育をどう考えるかということです。

社会や経済といった分野を中心に「役に立つか立たないか」という見方をするようになって、一番迷惑を被っているのは文学部のような、関学では神学部、文学部です。社会学部は、この頃は経済社会の中で必要ですから、「役に立つ」。そうすると文学部などはだんだん世間をせまくなります。ある時期までは進学する学生が多かったのにです。理由はいろいろありますが、文学部が一番リベラル・アーツに近かった学部だったからです。私も二〇年程前アメリカのカレッジに留学した時に様子を見たのですが、やはり文学部系の教育についてはあまりいい待遇がされていませんでした。立派な学校では、きちんと待遇しなければならぬということになっていたのでと思います。それからイギリスが、サッチャー時代になって特に文系の歴史だとか哲学に対して非常に冷たくなっていくということがよく言われていたことです。直接役に立たないからということですよ。

そういった現状を踏まえていますと、教育は現代社会の、特に経済を支える非常に重要な要素になってほしいと考えていることと、点数化することとが関係しています。教育ではごく単線的な評価をして良いというものではないはずだと思つと同時に、今の大学は、評価の時代になっているのです。社会的な評価をする外部評価、自分で評価しなさいという自己評価、学生に評価させなさいという授業を受けた学生の評価、学問の世界でも外部の評価というのが非常に大事になってきました。この評価をするということとは教育の中で非常に大事なことです。成績をつけるということとは、学校教育によらず教育の中で成果を問わないというのは無責任だと思います。そういう意味では、本当は昔から成果というのはどういうものであるのか、私たちの学校はどういう成果を上げてきているのかということ点を検しないといけないということはたくさんあったはずなのです。

さまざまな評価はだいたい一九九〇年頃から始まるようですが、一九九〇年頃は、団塊の世代の子どもがどっと入学して、大学はものすごく膨れ上がりました。次いで学校は少子化することが目に見えてきましたので、今後どういふふうに関西学院を再編していくかということで、外部からい

ろいろなことを言われました。そのために自己評価とか外部評価をすることが求められるのですが、現在の評価は点数化してランキングで順位を作り出すような傾向が強いと感じられます。しかも必ずしも客観的とはいえないものもかかわらず、その学校の長所、短所が一面的に指摘されることになります。そうすると、おたくはこういうことが出来ていないから、ここをきちんとしなさいとかというように言えます。内部も外部も、そういう項目別評価法というものを止む得なくやっているのです。内部評価においては、場合によると自己にとつて何が評価され、何が欠けているのかといった、ほんとうの真剣な評価が出来ない。評価だけでも大変な仕事だから、基準とされているものに照らして自分の学部に当てはめるとどうなるか、というだけに終わって、結局、長くてもここ数年の時期の教育しか点検することにならざるを得ないと思います。

私は、以前の学校が良かったと言っている訳ではないのですが、牧歌時代には頑張っている学校もあればそうでない学校もありました。それぞれの自己責任でやっていますが、いまや自己責任だけではなくて、国庫補助をもらっているという事もあって政府に財政責任がありますから、どんどん評価していく。もうひとつは、補助金に差をつけ

るということをやろうとしています。いま国家目的がこれならばそれに沿ったものは何なのかと、それに対して高い補助を出します。そうでないものには補助金を出さない。差別的補助金を作るといふ。かつて人件費補助とか経常費補助といっている時は、一律補助、今もありますが、その補助はだんだんと比率を下げきて、選別補助のようなものの比率を上げてきた。これが大学の現在おかれている状況で、国立大学の独法化がおこってきて、国立大学でも同じようなことをやっているわけです。

ちよつと前触れが長かったのですが、こういうことを前提にして学院史を作ることについては、評価時代の中で学院史を作るといふことが持っている意味はかなり大事なことでではないか。私が言おうとしていることは大したことではなく、大体想像がつくと思いますが、順次お話ししてみたいと思います。

二 教育は「百年の計」―精神的側面と実用的側面

教育は「百年の計」であるといえます。精神的な文化的側面と極めて実用的な側面を持っているというのが教育であるといふことができます。アメリカの有名な神学者で、

今から四〇年ぐらい前に亡くなった、ラインホルド・ニーバー (Reinhold Niebuhr 一八九二―一九七一) という人がいます。この人のあるところで言われた言葉が非常に普及しました。アメリカのある家庭に招かれて行くと、ニーバーと書いていないのですが、テーブルに置いてあるのを見て、こういう言葉にとても心を惹かれるんだなと思つて見たのです。それはこういう言葉です。

「神よ、

変えることのできるものについて、

それを変えるだけの勇氣 (courage) をわれらに与えたまえ。

変えることのできないものについては、

それを受け入れるだけの冷静さ (serenity) を与えたまえ。そして、

変えることのできるものと、変えることのできないものとを、

識別する知恵 (wisdom) を与えたまえ。」(大木英夫・訳)

変える「勇氣」はある意味でありうる。しかし、変えることのできないものを「受け入れること」は時代遅れではないかという思いがつきまとう。時代遅れとかどうかに関

らず、変えてはならないということを「冷静に」判断出来ること。その二つを識別することはなかなか不可能な部分が多いのですが、識別することのできる「知恵」と書いています。簡単にできることは「知恵」とは言わないのです。知識とはいえない「知恵」ですから判断できる総合的な力、「知恵」を与えたまえと、この「勇氣」とか「冷静さ」とか「知恵」とかは、教育にとつては非常に大事なものではないかと思えます。

教育にとつて「変えることのできるもの」と、「変えることのできないもの」とは一体どんなものなのかということですが、「これは変えていい」とか「変えてはいかんぞ」ということがはっきりしていないと、教育は難しい。というのは、教育にとつて一番大きな問題は、「時代に流される」ということです。知らない間に変わっていくということ。教育は社会の中に投げ込まれていますので、社会の中で知らない間に変わっていきます。いくら別世界だと言っている、日本という社会の中でどんどん変わっていく。建物は何も変わらないけれども、中身はゴロツと変わっていくということとはあり得ます。現に今はそういう時代だと思えます。

レジュメを少し読ませていただきますと、「変えてはな

らないもの」が自覚され、絶えずその時々々に具体化されるための、地に着いた持続的な教育プログラムが展開されるのが求められています。「変えることができないうもの」これは簡単に「建学の精神」と言うことができる。学校を支えるスピリットで、無意識では教育を支えていけるものではない。

キリスト教主義教育あるいはキリスト教学校、あるいは「Mastery for Service」ということについて、それについて雑談している時、ある院長がああいうものは「空気」のようにあるのがいいのだと言われたんです。それがあればそのとおりでいいのですが、実は「建学の精神」というものは空気のようなものではないのです。自然に発生するようなものではないです。空気であればいいに決まっています。それを聞いた時に、「関西学院というところはいい人を育てるところかもしれないが、もう少し考えないといけないのではないかな」と思いました。しかし、その背景を私は推測することが出来ました。これを取り上げたら学校が揺れるのです。「建学の精神」を何かで問題にしたらず、必ず学校はがたがたします。そつとしておきたい。もつといえは、そつと床の間に飾っておきたいという感じですね。私は変えてはならないもの「建学の精神」は、教育ブ

プログラムの中で具体的にカリキュラムも含めて、チャペルもありますし、ボランティアのようなものもありますし、いろいろなさういいうものに含まれて実現しなくてはいけないと思っっているのです。

「変えることができるもの」というのは、具体的な教育プログラムそのものなんです。授業をどうするかとか、時間帯をどうするかとか、学部をどうだとか、みんな変えていいものなんです。ところが、「変えていいもの」はなかなか変わらないのです。

「変えていいもの」と「変えてはならないもの」とが何なのかということが明確でなかったら、「変えていいもの」を変えてしまうとその学校が変わっていくように自分は感じるために、たとえば「変えていいもの」に対しても「変えてはならないもの」という思いをもつようになり、その場合は、非常に硬い学校になります。教育が柔軟性を持たない。そういうことはよくあることだと思います。どんどん変えていいとは言いませんが、教育の場合ですから、時代に即応して変えていっていいものだと思うのです。しかし、その中に「変わらないもの」が一貫してあるじゃないかと言うようなことが具体的に分つてくれば、私は教育に対して非常に安定した思いが生まれてくるのではないかと

思います。それが、私学を支える一番大きなことだと思えるのです。

このことについて、関西学院の寄付行為第三条は、「この法人は教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教主義に基づいて教育を施すことを目的とする」とあり、これが「建学の精神」を示す基本的な方針です。「キリスト教主義に基づいて教育を施す」がこの学校の精神で、「変えることのできないもの」という意味がここにある。スクール・モットーとしてベーツ四代目院長が「Mastery for Service」ということを言われました。「奉仕への練達」や「奉仕のための練達」と訳されています。これは、最近編纂室の人が調べたところベーツ院長がまるまる発想されたものではなくて、カナダのカレッジにあった非常に似た言葉が院長の頭のなかにあつて、旧制の高等商業学校のモットーにされたものが、関西学院全体のスクール・モットーになったという事で、まったくゼロからの発想ではなかったようです。

これをキリスト教主義的な内容に言い換えると、神と人に仕えるために―神というのはクリスチャンであろうとなくろうと、何か畏れるべきもの、上なるもの、人を超えているものそういうものでいいわけです―、それと、人に仕

えるために学問に熟達すること、一生懸命に努めることと
いうことです。「マスターになる」という訳もあるよ
うですが、そのマスターは指導者になると訳すと、今では
マスターというのは性差別、男性名詞なので、そのことも
問題ではありますが、学問をよく学ぶということに熟達す
るということです。

三 教育の自己評価・外部評価と「建学の精神」

教育の自己評価、外部評価をやっているのですから、実
際は「建学の精神」についても自己評価も外部評価もやっ
ています。しかし、「建学の精神」については外部の人た
ちが評価するというのは難しいと思います。具体的にその
学校でしか理解できないような形で取り組まれている、自
己責任のより強いものが「建学の精神」だと思われま
す。

今から三〇年弱前ですが、私大連盟の加盟校の中から、
関西からは同志社と関西学院ではわたしが出て、『私立大
学白書』というものを作るということになりました。それ
は一九八四年頃に単行本で出され、英訳本も出ました。こ
こで、「建学の精神」というところを、同志社の先生と二
人で担当いたしました。そのなかで非常にはつきりしてき

たことは、国立大学の「建学の精神」というのは一体何な
のかということと、私学の場合は「建学の精神」があるか
ら学校が建てられたという、もともと学校が建てられた根
拠に「建学の精神」があることを再確認しました。教育機
関を作る場合、基本方針もなくただ単に学校を作りますと
いうことはあると思います。予備校などではそうでもない
かは分りませんが、それでも多少はこの予備校でも、これ
これと基本方針を言うはずだと思えますね。私学の場合
ももっと明確である。国立大学の場合は、国家優先のために、
国家目的のために建てるわけです。そういうのは私学には
ないわけです。私学の皆さんとそれを議論していたら、キ
リスト教主義の学校は、そして、宗教が背後にある学校は
とても明確なものをもっています。そうでない学校、たと
えば慶応の福沢諭吉の場合とか、同志社の場合は、キリス
ト教主義のほかに初期の段階では新島襄のもっているもの
が学校を運営するのに非常に大きな影響を与えているので
はないかと思えます。

ですから自己評価、外部評価する場合でも、「建学の精
神」と「変えていいもの」である教育プログラムについて
の検証というのが実際に行われています。たとえば、実際
には「建学の精神」といいませんが、学校の目的とかを評

価する点において、評価をしていくことになります。

でもほんとうは「変えることのできないもの」と「変えることができるもの」との間は分けられるよう分けられないのです。さきほども言いましたように、きちんと分かれているということは問題なんです。キリスト教主義というときにいつも出てくる問題は、大学の学部組織としての神学部が存在しているとか、宗教主事や宣教師の存在とか、キリスト者教職員が在任しているとか、チャペル時間の設定、キリスト教関係科目の設置だとか、研究所の存在とか、そういうものは全部外形的なものです。そのようなものがあります、と書くことが評価なのか、それらがあつて活動しています、というのが評価なのか、「建学の精神」に基づいて設置されているものなので、どのように教育に影響を与えているかということが大事なのです。寄付行為のなかには「この法人は教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教主義に基づいて教育を施すことを目的とする」。「教育を施す」と書いてあつて、キリスト教教育を施すとは書いていないです。教育全般をキリスト教主義教育で行うと言っているのですから。もちろんこれには限界があるわけですから、何もかもということにはならないとは思いますが。

私は、大学院生の終り頃にクリスチャンになりました。しばらくして教員になって、それ以来、私はこの学校の「建学の精神」にもとづいて、キリスト教主義教育をやってきました。そのなかで、最後まで心にかかっていたことがあります。「あなたは経済学をやっているけれども、どうしてそれがキリスト教主義教育に基づいているといえるのか」という問いかけがずっと自分にあり、私がクリスチャンであることを知っている人たちからもよくありました。これは何とか答えを出さないといけないと思い、退職前に『聖書と経済』という本を書いて、中間報告のような卒業試験みたいなものを出しました。その一番動機になったものは、私は忠実にやってきましたということではなく、私はクリスチャンとして関西学院に勤めているということを何かで証したいと思つていたようです。

個別学校の自己評価、外部評価においても、「建学の精神」との関係の評価は実際になされていますが、「評価」の中核を占めているものは「変えることができる」ものです。普通の教育プログラムのようなものの中で、時代の評価に込んでいるかとか、効果をあげているか、というようなことはあつても、「変えることができない」側面は、先ほど挙げました学部の存在とか、教育関係の教員の問題と

か、教育プログラムのなかの授業、チャペルだとかそういうことの中で、どのように実体化されているのかということから評価されていなければいけないのではないのでしょうか。在学生にどういう教育効果を与えているかということろまでやらないといけないのです。実際ある程度出来ると思うのですが、ここ何年間のことが頭にあるぐらいではないけないのではと思います。いよいよ結論めいたことをお話しする段階になります。

今日の「個別学校史」というものがなぜ必要なのか、それはどういう意味があるのかということについて、過去に日本の「個別学校史」が書かれてきた理由は、時代によっては少し違々と申しましたが、今、学校史をまとめる必要がある一番大きな理由は、現在行われている教育の中で、如何にして安定感をもって、しかも積極果敢に時代のなかで学校が生きていくためにはどうしたらいいかということを考えるひとつの手がかりを得るためだということだと思います。学校史を編纂していくプロセスとそこから得られる成果だと思ふというのが結論なんです。

四 今日「個別学校史」の意味するもの

最初に申しましたように、学校史は学院でもまた学部史でも作られています。経済学部、文学部、法学部、商学部、理学部だとかいくつかの学部で作られています。しかし、さわめて事実羅列的で、昔の文献を集めてあるだけというものも学部史として出ています。実際には学校史を作るには非常に困難でして、なぜかという、みな教職員は自分の仕事をもっているのに、学部史を作るために教職員を配置しなければいけないのです。専任の人を置く必要はないですが、片手間にしても、時間をかなり取られます。そのことに集中してやる人を求めるといふことです。

しかも問題なのは、学校史を書いても何も文部省は評価しないのではないかと思うのです。学校史を書くことは、余計なこと、勝手なことということではないか。そんなことをするのなら、このようなことをしなさいということもしれないと思います。学校史が作られたから評価されたということとは聞いたことがあります。事実はそのではないかもしれませんが、私はそういう感想をもっております。

学校史は評価されない上に、過去にいろんな問題を抱えている学部で、改めてそれを暴きたくないということだっ

であり得ると思います。真相は闇の中で、いまさら明らかにされると困るという学校もあると思います。その学校史で真相は明らかではないと書いたとしたら、その学校は何をしているのかということにもなります。推測でも書かないといけないですね。だからそういう危険なことまでしてということもありますから、積極的な理由がなければまず作ろうとしないです。

関西学院は手間隙かけて作ったのは、『関西学院百年史』です。それまでは安直に作ってきてあまりお金をかけていないと思います。ですが、学校史を書くということは、存在根拠ですね、レゾンデトルを問われてくる。それは、こんな学校史を書くというのにどんな意味があるのかというようなことから始まって、本当に社会のなかに存在するところに積極的な意義があつたのか、今までどれくらいその意義を高めてきたのか、というようなことが中心なこととして必要です。今まであんなことこんなことをやりました、というだけではつまらない物になります。そこにはいい事ばかりではありません。なぜこんな事がこの時に起きたのかということも書かないといけません。

私は早い時期に関西学院史を読んだとき、関西学院の特徴をバスのと摺んだ事があります。それは大体当たっている

と思います。それはある種の偏見を与えて、ものを見るときに歪ませてしまったことがあつたとは思っています。しかし、客観的な目を持つためには、良かったと思います。この学校が一貫して持つ特徴、いい特徴ももちろんありますが、非常に問題点もあります。そして、その存在根拠や理由とかが、学校史を作るときはいつでも問われていくわけです。学部史でもそうです。いろんな事件が起こってきたというだけでなく、そのときはどういうふうに克服してきたとか、それが今まで尾を引いているのか、とかを書いていかないといけないのです。もちろんこの『百年史』だから何もかも明らかにされて書かれているのかというと、そうではないです。学部に関しての問題は取り上げていませんので、本当は学部の中にもっと問題があつたはずですが、取り上げていません。

現在行なわれている評価というのは、短期的な評価に限られてきています。数年とか短かったなら一年、去年一年どうだったかとかに限られてきている。学校史は比較的短い期間だけ取り扱うものもありますが、創設以来のことを取り上げないと歴史にならないわけで、いつでも創設から現在までずっとみていくのが普通です。こういうことをやることによって、その学校では今何が問題であるか、何を

大切にしないといけないか、どういうところが変えないといけないのに変わってないのか、ということとは分つてくるわけです。これは、私はとても大事なことで、学院史を梃子にして、本当は学校の運営がわずかでもその学院史から影響を受けたほうがいいと思います。おそらく学校史を書いたからといって、実際にはそれから左右されないとは思いません。現実は何かことが起きると学校史を見てみるとやはり同じ事が起きている等と、困ったなと思われることは過去にも同じ事をしているのです。いいことというのはなかなか拾い上げるのが大変で、自画自賛、礼賛しているような学校史なんぞは意味がないと思います。

関西学院は過去五回学校史を出しています。『四十年史』、『五十年史』、『六十年史』と『七十年史』と、十年ずつで出したのです。その次が『百年史』で三十年間あいています。最初の『四十年史』は一九二九(昭和四)年上ヶ原キャンパスに原田の森から引越してきたとき編纂されて発行されています。四十周年です。非常に記念すべき時に上ヶ原に来了。この移転に一番大きく貢献したのはもちろん具体的に交渉した人だと思えますが、私は宣教師の英断だと思えます。宣教師が自分たちが営々として作った原田の森で、新校舎まであったのですから、それを捨ててこちらに

移ってくるというのは何のためか、それは大学を作りたいがためにです。第一次世界大戦の不況で、とてもアメリカの教会で献金を集めてその献金を元にして学校を作るということは出来ないということで、どうしたらいいかとなり、いろんな学校がその後もしてきましたが、郊外へ移ることによって、余剰金を出して、そのお金が大学設立の基金になつたわけです。それが四十周年です。

その『四十年史』は読物としては大変面白いものなのです。ほほひとりの人が書いたものです。それはその父上も関西学院の教員で、クリスチャンで当時中学部の教師をしておられた村上謙介という方が独力で書かれたものです。これは和装のようなきれいな表紙で、紙は和紙ではないのですが軽い紙で、洒落た本です。さすがにと思わせるどっしりした本ではありません。それで『五十年史』は、またまた事務的で薄いうえに重いばかりの本です。『六十年史』はまたフランス本のような紙で折って表紙が作られています。『七十年史』は箱入りの一冊の本です。その『四十年史』に初期の関西学院のことがずっと書かれているのですが、五十、六十、七十年史とも初期のことは『四十年史』を引き写すだけで、事実に関する検証というのはほとんど行われなかったのです。私自身はあまり関心を持っていません。

んでいたが、『百年史』を作る時にいちおう『四十年史』は眉唾であると、本当かどうか全部それを文献できちん調べないといけないというふうに思いました。文献にないもの、人の話として聞いたものも書かれています。また、新聞の記事なども引用して書かれていますので、ずいぶん関西学院が好きで関西学院の資料を集めておられて、父上の『村上博輔日記』を使ったりもされています。その父上の日記も少しずつ起こして『関西学院史紀要』に載せておられます。その記念すべきものが出たのですが、どちらかというと事実とか内容に関しては必ずしも評価に十分堪えるものではないという感があります。

『五十年史』は一九三九（昭和一）年の太平洋戦争が始まる直前で、これは非常に特徴的で、当時大学が出来たりしてきて、たくさん学内に規則だとかが出来てきます。そういうものを書き込んであり、資料集のような少し無味乾燥なものです。『六十年史』は戦後一九四九（昭和二四）年で、お分かりだと思いますが、新制に変わっていく時で、関西学院は一九四八（昭和二三）年に変わりましたので、ドサクサ紛れの中で出来上がったものです。何か作らないといけないという使命に燃えられて何人かの方で作られています。『七十年史』は一九五九（昭和三四）年です。こ

れは上ヶ原の拡大期という時期に当って、理学部と社会学部を開設するという見通しが立った時期です。学生会館が新たに建つとか意気揚揚たる関西学院という時期に書かれたものです。

この『六十年史』、『七十年史』のかなりの部分に回顧録が載っているのです。個人名の回顧録です。普通学校史を編纂するときに回顧録を載せるか載せないかというのは重要な問題で、回顧録を載せると記念誌になるのですね。記念出版ということになって、歴史編纂ということにはならないと、私はそう思っておりました。特に『七十年史』などは面白いですが、たくさん個人名でいろいろなことが書かれています。ただ歴史編纂で大事なことで、私は歴史家ではありませんが、伝聞とか人が書いたものを鵜呑みにして信用してはいけないということです。必ず間違いがあります。思い間違い、全く無かったことをあったように思っておられる方もありますから。

そのあとの八〇年出版という時期はご存知のように大学紛争です。一九六九（昭和四四）年です。とても書く余裕がありませんでした。その後、九〇年史をといてより、この時に初めて学院史としてきちんとしたものを出版するためにどうすべきかということで、まず資料を収集整理

しようということになりました。そこで九〇周年の前年の一九七八（昭和五三）年に学院史資料室が図書館の一角に設けられて、それを整理する人がひとり、入交光三さんという図書館の生き字引のような方がおられましたので、こつこつと過去にあったものを、使ったものを整理するということが始まって、九〇年史は出さないうで百年史を睨むということになりました。久山康理事長・院長の時代のことです。久山理事長・院長は、学院史は大事だという判断でしたし、また資料室初代室長の小林信雄先生も強く進言されました。しかし学内で騒動が起りましたので、学院史を作るにはどうしたらよいかということになり、聞こえてきたところ外注するという話もありましたが、結果、袖本学経済学部教授が百年史編纂委員長となり、取り組み始めてご存知のように四巻本が出てくることになりました。

一九九一年から一九九八年、前後七年間かかっています。その前の百周年の時には写真中心のものを出そうということで、写真でみる『関西学院の一〇〇年』を出すということになり、『百年史』の前にこの委員会が出来て、私もそのなかに入っていました。とても立派な写真集が出来ました。その後、学院の要職に就いた人たち、理事長だったり院長、学長になったり、みな主要な役をされた方が参加さ

れました。それが終わって本格的な『百年史』ということで、百周年後、委員会ができ、最初が一九九四年に『関西学院百年史 資料編Ⅰ』が出来て、翌九五年に『関西学院百年史 資料編Ⅱ』が出て、九七年に『関西学院百年史 通史編Ⅰ』、九八年に『関西学院百年史 通史編Ⅱ』が出るということでした。そしてこの編纂委員会は解散しました。

これは先ず資料編をまとめ、これに基づいて年史を書くということ、先に資料編が作られました。その中には英語の文献がかなりたくさんあります。戦前の理事会は外国人がトップにいたということもあって、その記録は全部英語で書かれていますので、そのまま翻訳しないで載せました。本文は日本語で書かれています。

五 学校教育の全課程形成期に入った関西学院と学院史編纂

『百年史』を作ったということで、関西学院の教育にどういう影響を与えたのか、このようなものを編纂することの意味があったのかということ、これは関西学院特有のことかもしれませんが、その編纂に携わった編集委員は、そのあとで学部長や、学長や院長になったことは学院史を

作ったことの効果の一つであったということが考えられます。その人たちは学院史を作ったことで、改めて関西学院の何かを頭に叩き込んだと思うんです。しかし、それぞれ実際に行政をする時にそれがどの程度反映したかどうかまで分りませんし、影響についてはここで言うことは止めておきます。

一番大事だったことは、歴史家といった専門家だけが集まって作ったのではなく、また関西学院大好きという人もおりましたが、それでもない人、私などはちょっと横から見たりでいろんな人がいたということです。その結果、関西学院の問題というのにもよく分りましたし、関西学院の抱えている将来何を大事にしないといけないかという事がある程度分りました。たとえば章別を作っていた時、これは外すことが出来ないこととかが出てきたりしました。学内だからかも分りませんが、きちんとしたものを作っていないと、学校というのは大海の葉のように揺れ動いていくということが分りました。歴史というものを無視した形でいると、現に揺れ動いている学校のようになります。だから、もしも「変えてはならないもの」をある程度維持しようとするために学校がギクシャクすることは、良いことではないかと思えます。ギクシャクすることで何か答えを

得ていく方が、何もかも時代の流れでスムーズにいったるよりは、その学校としては相応しいのではないかというふうに思えます。また、時代の流れの中で意見の相違というようなものではなくて、「変えてはならないもの」と「変えるもの」との「識別」と「知恵」をもって、変えていくものはどんな変えていく。変えてはならないことを非常に冷静に見つめることが出来るということ、これは別にクリスチャンであるとかそうでないとかに関係なく、ある程度識別可能だと思えます。

関西学院が、今の言葉でいう「人権」だとか、別のことばで言うと「人格」だとかということを大切にしないといけないといっているもつとも背後にあるのは、どう考えてもキリスト教主義だと思えます。こういう視点からしても、現在は重要な歴史的転換点であるといえます。

今年度には小学校が開校し、来年度には聖和大学との合併で、幼児教育が加えられ、その結果、幼児教育、初等教育、中等教育、高等教育と一挙に、関西学院は学校教育の全課程をもつ学園になります。関西学院創立一二〇年の二〇〇九年度は、学院史において大きなエポックです。

それで、今度いつ学院史がでるかは知りませんが、小学校開校、大学学部・大学院の増設と改組、聖和大学との合

併と幼児教育の開始などは、ここ数年のあわただしい取り組みです。現在、ここに至った学校法人関西学院を総括し、少なくとも自己評価を明らかにする段階だといえます。ここにこそ、いま新たな学院史編纂が求められている中心的な理由があります。

最後に、わたしが関わってきた編纂室について触れておきます。四冊の『百年史』を作った段階で、創立一一一周年事業が始められた翌二〇〇〇年度に「学院史編纂室」と名前を変えたのです。資料室というのはあまりにも事務的な名前すぎるということで、部屋の人たちと一緒に考えました。その時は夢のような話をたくさんしました。二階に食堂を作った誰でも入って来られるようにして、ゆつたりと下の芝生を見ることが出来て、一階は学校のこといろいろ分るようになっていてと。しかし、本意は編纂室が片隅の湿ったかび臭い施設じゃなくて、非常に積極的な施設にしようと考えました。

ですから美術品など本当は学院史にあまり関係ないのですが、永田先生にお願いしまして学内に所蔵している美術品を今後どうして保管するかということも考えて、整理調査をお願いしました。それがいろいろな考えから、博物館の設立につながってくるということです。そういうことで、

学院史編纂室という名前に変えて前向きにいくと、将来の関西学院というものに方向付けを出来るような役割を果たしていくような活動として歴史編纂や成果が出るようなものを目ざして、常に体制を整えるようにしなければいけないかなということでも名前を変えたのです。

『百年史』の成果としては、学院史を出した後「関学」学という総合コースの授業をしています。その経過は参考資料(2)に示しています。一九九五年度から始まっています。一九九四年頃に教務課に柚木教授等が申請をしましたが、その時こんな授業がカリキュラムにあげて出来るのかと言われましたが、結局始まりました。そのような講義をしてどうなのかと思っている人は今でもいると思います。負けてはいけないです。編纂するということはある意味で急流を駆け登るといぐらいの力がないと出来ないのです。これで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

永田 本当に「変えることのできないもの」というところから、過去そして未来へ展望というのと、その役目の重さということを感じましたが、いろいろな立場からみなさんの思いがおりだと思えますので、どなたからでもご質問

とか歴史について発言していただければと思います。

山内（本大学名誉教授） 久しぶりに山本栄一節を聞かせていただき、胸に迫るものがありました。最初にラインホルト・ニーバーの祈りの言葉を引かれましたが、実は私、大学紛争のさなか自分なりに悩んでいた時、神学部のチャペルで松村克己先生がこの祈りを読まれたのを聞いて大変勇気づけられたことを想い起こします。今日の発題におけるキーワードの一つは関西学院設立の目的にかかる寄付行為第三条の「キリスト教主義」ですが、ここであえて「主義」というタームを入れる積極的な意味合いについては『百年史』に明記されています。私学関西学院が文化と教育一般の地平で自らのアイデンティティーを自覚的に表明する旗印、拠って立つ「土台」です。しかし、この「主義」が排他的な原理主義と混同される危険を避けなくてはなりません。関西学院の構成員だけでなく、全国のいわゆるクルスチャン・スクール関係者の間でこの「キリスト教主義」をめぐる共通理解を定着させるために今後も議論を継続する必要があります。私には思います。

それから、関西学院の存在理由を問い続けることと歴史編纂の意味が直結しているという今日のお話の主旨は、是

非とも全教職員に聞いてもらいたいですね。『百年史』通史編の基本方針、すなわち一私学の歴史という枠を超えて、日本の近現代教育史を踏まえる、そして「建学の精神」に基づく学院の個性ある歴史像の検証、さらに将来への希望ある展望を明確にする、このコンテキスト、アイデンティティー、ヴィジョンという三語は今後の学院史編纂作業においても変わらないプリンシプルですね。五年先に迫った「二二五周年史」刊行に向けて、今日出席されている井上琢智先生らを中心にこれまで「学院史」に関わられた教職員スタッフを糾合し、準備作業のスピードアップを図るべきでしょう。また今広く活用されている『関西学院事典』の改訂案もありますが、慶応義塾が創立150周年記念事業として『関西学院事典』に範をとった「大事典」を企画し、こちらは頒価何万円とか聞きました。学院史編纂室が担っている本質的な役割について学院当局の一層の理解と支援を望みたいと思います。

永田 ありがとうございます。山本先生何か。

山本 いや別に、ありません。事典のことを触れませんが、『百年史』を検討していく途上で、『学院史紀要』

と『関西学院事典』は出せるのではという話が出ました。いろいろな学校が資料集のようなものを出していたので、ここで『紀要』を出そうと決めて、『百年史』出版中に毎年刊行し、編纂が終わって中断しましたが、編纂室になったときに再刊しています。また『事典』は一度だめになっていたのに一一一周年記念として蘇り、井上琢智先生と事にあたったのですが、結果的にはやりたかったことのひとつは出来ていないのです。あの中にたくさん的人物を入れたかったのですが、そのことで最後の最後まで誰を入れて誰を入れないかという問題は採める元だと、だから、もしするのなら『関西学院人物事典』というのを作らないといけないと思います。かなり網羅したらいいのだと思いますが、あの事典には学院の要職にある現職と要職に就いた故人と、故人となられた著名な方だけしか載せていません。説明も短いもので、非常に苦勞したものです。私は責任者だったので、とてもよく働く方もいましたので、みんな忙しいのによく出来たものだと思います。あの本は『百年史』五冊目として『百年史』と同じ版と装丁で作ったのですが、こういうものが出来た学校だからたいした学校だと思うと共に、これしか出来ない学校かもと。

竹本（本学経済学部教授） 私は関西学院出身でもないしクリスチャンでもありません。そういう意味では関西学院の組織では一番異端の存在かも知れませんが、だからこそ学院の「キリスト教主義」に敏感になるのです。ひよつとしたらクリスチャンの方や関西学院出身者以上に敏感かも知れません。チャペル講話や学部長としての挨拶をする場合が一番戸惑うのは、キリスト教主義をよく理解していないことです。そういうときにいろいろな人に聞いても明確な答えがないのです。ということは非常に失礼な言い方だけれども、キリスト教主義が十分に生きていないのではないかと感じます。それは山本先生のおっしゃる二ーバーの「変えられないもの」と「変えられるもの」ということでは、例えば、「変えられないもの」であるキリスト教主義は、生きた形で今後も長く保持されるのだろうか、ということですね。関西学院がキリスト教主義にたつということは変えられなくてもいいのですが、その中身をどのように現代的に咀嚼して、しかも分かりやすくみなに浸透させられ共感をえるか、そこが大事だと思います。つまり変えるべきでないものを変えることによって変わらせないという努力が大切なのではないのでしょうか。

山本 その通りです。私はクリスチャンであったことが、幸いという事ではなくクリスチャンであるから奇妙に先生とは別の負い目を持っていて、あなたがすべき仕事はブラスアルファあるのじゃないかと言われてきたと思っっています。でも、私自身は、個人的には処理できるのですが、学校というところを通して、カリキュラムの中になりに組み入れたらいいと以前から思っていたんです。どういうふうにしたら良いかというと、もちろんキリスト教学はあるのですが、あれひとつではなくて何かもうひとつどうかと思っっています。おそらく人間福祉学部などでは、やはりキリスト教と言葉を出さなくても人間とは、人格とかの話をしていくとそういうところに触れていくと思うのです。そのように触れる学問をどの学部でもキリスト教学以外に持つということがひとつ、それから教育というのは技術的な側面だけではなく、関西学院は人格教育をいかにすべきかを問いかけたと思います。本来的に私は人格など教育できかないと思います。しかし、人間に問ひ掛ける教育はできると思うのです。そういうものを意識的に作るということが必要だと思っっています。チャペル以外で、科目に必ず作ると言うことが要る。そのために人材がいるというふうと思ったりしました。そうおっしゃる先生は少数派だと思

います。内心で思っっておられる方はかなりおられると思いますが、口に出される方は非常に少ないと思っっています。先生はそれをとて正直に口に出されたと思っっています。それでも内々に思っっておられる方がおられる限りは、と思っっています。そこが空気みたいにとおっしゃる方がおられますが、そうではなく私は顕在化させないといけな思っっています。

永田 時間が参りましたので、これで本日は終わらせていただきます。本当にどうもありがとうございました。

学院史編纂室追記

この第20回関西学院歴史サロンの参加者から頂いた質疑応答のうち、紙面の都合上、その一部を掲載する。

学院史編纂室 年譜

(2008年11月 学院史編纂室作成)

- 1978 6月 学院史資料室開設(図書館貴重図書室一隅を間借り) 室長小林信雄(神学部教授)、嘱託職員入交光三、アルバイト職員1名(7月)
- * 入交光三作成「資料室分類表(案)」により資料を分類・整理
- 1979 4月 溝口重雄主幹事務取扱就任
- 9月 「学院史資料室規程」制定、施行
- 11月 「学院史関係公開セミナー」開催(於 千刈セミナーハウス、キリスト教主義教育研究室共催)
- * 旧日本メソヂスト教会豊予地区教会資料の収集(キリスト教主義教育研究室と共同)
- 1980 3月 『学院史資料室分類表』発刊
- 4月 小林信雄室長海外留学により、室長事務取扱に米倉充(宗教総主事)任命
- 5月 第1回資料室運営委員会開催
- * 入交光三嘱託職員退職
 - * 旧日本メソヂスト教会北九州地区教会資料の収集(キリスト教主義教育研究室と共同)
 - * Bray 夫人収集のランバス家関係資料、吉岡美国保存資料の受領
- 1981 6月 溝口重雄事務長、星野久雄主幹就任
- 11月 資料室顧問に武藤誠名誉教授就任
- * 豊予地区・山陽地区教会資料の収集(キリスト教主義教育研究室と共同)
 - * 村上謙介保存資料の受領
 - * 「旧カナダ・メソヂスト教会宣教師報告その他1870-1930年代の資料」をマイクロフィルムで収納
- 1982 * 校歌資料等の資料展示(於 図書館玄関ホール、産業研究所前ホール)
- 1983 * 旧メソヂスト教会近畿地区の教会資料の収集
- * 資料展示を図書館玄関ホール、産業研究所前ホールで開催
- 1984 6月 宮本義澄主幹就任
- 10月 新設資料収納庫の竣工
- * 『関西学院史資料目録』第1号(5月)、第2号 発刊
 - * 「理事会記録綴」(昭和20～25年)等の受領
 - * 上ヶ原移転当時の関西学院新聞コピー等の資料展示(於 図書館新館3階、産業研究所前ホール)
- 1985 3月 日本人教師住宅C号館に移転完了
- 3月 溝口重雄事務長定年退職
- 6月 星野久雄事務長就任
- 12月 『資料室便り』No.1 発刊
- * 『関西学院史資料目録』第3号発刊
 - * 神学部より戦前戦後の資料・巡回文庫の移管

- 1986 8月 小林信雄室長・山内一郎神学部教授（運営委員）、カナダ・アメリカのメソヂスト関係資料収集のため出張
- 10月 研究講演会 「父、H.F. ウッズワースについて」（D.E. ウッズワース）
 * 『関西学院史資料目録』第4号、第5号発刊
 * 『資料室便り』No. 2、No. 3 発刊
- 1987 1月 研究講演会 「カナダメソヂスト教会の日本伝道について」（長野工専 塩入隆教授）
- 2月 研究講演会 「在日本メソヂスト諸教会の特質」（山梨英和短大 澤田泰紳教授）
 * 創立100周年記念事業委員会—事業実行委員会のもとに「記念出版専門委員会」設置（委員長 小林信雄室長）
 * 『資料室便り』No. 4、No. 5 発刊
 * 『関西学院史資料目録』第6号発刊
- 1988 3月 星野久雄事務長定年退職
- 6月 長尾文雄事務長事務取扱就任（1989年より事務長）
 * 「記念出版専門委員会」事務を企画課と分担、囑託職員2名 アルバイト職員1名増員
 * 『関西学院の100年』（図録）編集支援
 * 『資料室便り』No. 6 発刊
 * 『関西学院史資料目録』第7号（補遺版）発刊
 * 「新月文庫」の発足（大学図書館との連携）
- 1989 8月 小林信雄室長・山内一郎神学部教授、カナダ・アメリカで海外資料の収集
- 11月 『関西学院の100年』（図録）刊行（創立100周年記念事業委員会 記念出版専門委員会編）
- 11月 「旧海軍地下壕調査委員会」設置（事務局担当）
- 1990 3月 「記念出版専門委員会」解散
- 4月 「関西学院100年史編纂委員会」設置（事務局担当）
- 4月 川崎啓一副主査転入（6月 主任昇格）
- 5月 「関西学院100年史編纂実務委員会」設置（事務局担当）
- 11月 座談会「関西学院100年史を考える」（出席者：小林信雄、柚木学、山内一郎、山本栄一、奥田修、田中康男、長尾文雄）
 * 『資料室便り』No. 7 発刊
 * 「西日本大学史担当者会」（1990年発足）に加入（現名称「全国大学史資料協議会 西日本部会」）
- 1991 3月 小林信雄室長退任（定年退職）
- 4月 柚木学室長（経済学部教授）就任＜在任 1994年3月まで＞、資料室顧問に小林信雄名誉教授就任＜在任1999年3月まで＞
- 4月 「関西学院100年史編纂委員会」「関西学院100年史編纂実務委員会」を「関西学院百年史編纂事業委員会」「関西学院百年史編集委員会」に名称変更（事務局担当）
- 6月 『関西学院史紀要』創刊号（関西学院百年史編集委員会編）発刊
- 9月 山内一郎運営委員、G.E. パスカム運営委員は、北米のメソヂスト教会関係の大

第20回関西学院歴史サロン

- 学資料室と図書館、ランバス家、ニュートン家親族を訪問し、資料収集
- 9月 「旧海軍地下壕調査委員会」、理事会に「旧海軍地下壕調査委員会報告」を提出(調査活動終了)
- 11月 座談会「キリスト教主義教育学校史を考える」(出席者：河野仁昭、遠藤トモ、若山晴子、西口忠、柚木学)
- 1992 * 『関西学院史資料目録』(暫定版) 発刊
* 中西良夫百年史編集委員、北米のドルー大学資料室を訪問、資料探索
* 『関西学院史紀要』第2号発刊
* G. E. バスカム運営委員は北米のメソヂスト教会関係の資料収集
- 1993 3月 座談会「学院史資料に見る関西学院の半世紀」(出席者：柚木学、山内一郎、山本栄一、井上琢智、中西良夫)
* 中西良夫百年史編集委員はエモリー大学資料室で資料探索
* 『関西学院史紀要』第3号発刊
- 1994 3月 『関西学院百年史 資料編Ⅰ』(百年史編纂事業委員会編) 刊行
3月 柚木学室長退任 長尾文雄事務長退職
4月 畑道也室長(文学部教授) 就任 < 在任 1996年3月まで >
6月 山本喜一郎事務長就任
* 『関西学院史紀要』第4号発刊
- 1995 5月 『関西学院百年史 資料編Ⅱ』(百年史編纂事業委員会編) 刊行
- 1996 3月 畑道也室長退任 宮本義澄主査定年退職
4月 山本栄一室長(経済学部教授) 就任 < 在任 2005年3月まで >
* 「全国歴史資料保存利用機関連絡協議会」(1976年発足) に加入
* 『関西学院史紀要』第5号発刊
- 1997 5月 『関西学院百年史 通史編Ⅰ』(百年史編纂事業委員会編) 刊行
- 1998 1月 『関西学院百年史 通史編Ⅱ』(百年史編纂事業委員会編) 刊行 (『通史編 索引』は1999年3月刊行)
1月 学院史資料室事務室 旧日本人住宅から時計台に移転
3月 「百年史」編纂事業プロジェクト、3月末をもって終了
4月 資料室顧問に柚木学名誉教授就任 < 在任 2000年3月まで >
6月 川崎啓一主任転出、池田裕子副主査転入
* 第2次時計台利用検討委員会の答申に基づき、将来時計台が「関西学院記念館」として整備完了するまで「時計台管理運営委員会」を組織し、資料室が時計台全体を管理することとなる
* 『資料室便り』No. 8 復刊
* 「大学史研究会」に加入
- 1999 5月 第1回関西学院歴史サロン開催 「大学と私」(海老坂武文学部教授)
6月 「111周年記念事業」の一環(事務局校友課)で『関西学院事典』が制作されることとなり、「関西学院事典編纂委員会」発足、その下に同編集委員会(山本栄一委員長)を構成(事務局学院史資料室)
* 池田裕子副主査、ベーツ院長の胸像をめぐってカナダへ出張
* 『資料室便り』No. 9、No.10 発刊

- * 第2回関西学院歴史サロン「ランバスの頃のキリスト教伝道」(藤田太寅総合政策学部教授)
- * 「神戸外国人居留地研究会」(1998年発足)に加入
- 2000 4月 学院史編纂室に改組、「学院史編纂室規程」改正施行(「学院史資料室規程」は改称)
- 4月 美術顧問に永田雄次郎文学部教授就任 <在任 2007年3月まで>
- 6月 山本喜一郎事務長転出、高橋正事務長就任
- 9月 「全国大学史資料協議会」全国総会・研究会(於 本学、学会開催補助・111周年記念事業冠学会補助)
- * 『関西学院史紀要』第6号(学院史編纂室編)発刊
- * 『学院史編纂室便り』No.11、No.12 発刊(『資料室便り』改題)
- * 第3回関西学院歴史サロン「知られざる学院史の一齣一民芸運動との関わりをめぐって」(神田健次神学部教授)
- * 第4回関西学院歴史サロン「商科九十年の歴史を『関西学院百年史』から学ぶ」(福井幸男商学部教授)
- 2001 4月 編纂室顧問に小林信雄名誉教授就任 <在任 2004年3月まで>
- 6月 松尾繁晴主幹就任
- 9月 『関西学院事典』(関西学院事典編集委員会編)刊行(関西学院創立111周年記念事業)
- * 『関西学院史紀要』第7号発刊
- * 『学院史編纂室便り』No.13、No.14発刊
- * 第5回関西学院歴史サロン「ノーマン家の人々の生と挫折ー『関西学院百年史』外伝ー」(竹本洋経済学部教授)
- * 第6回関西学院歴史サロン「『自分のための Mastery for Service』をめぐって」(宮原浩二郎社会学部教授)
- * 神戸市立小磯記念美術館「明治・大正神戸生まれの芸術家たち展」に神原浩作品1点、神戸そごう店「2001年 神戸聖書展」に河上丈太郎愛用聖書1点、西宮市大谷記念美術館「名所を描く」展に神原浩作品2点貸出
- 2002 4月 第1回関西学院史研究月例会開催「戦中・戦後を関西学院の学生として過ごして」(大谷晃一帝塚山学院大学名誉教授)
- 7月 「学院史編纂室の将来構想について」を理事長宛提出
- * 学院史編纂室共同研究プロジェクト発足 研究テーマ「院長研究一べつー」(主任研究員山本栄一)、「関西学院の戦前・戦中・戦後」(主任研究員井上琢智)
- * 第2回関西学院史研究月例会「原田の森と上ヶ原で学んで」(小寺武四名誉教授)
- * 第3回関西学院史研究月例会「教会史から見る学院史ー吉岡・定方・外村・ヴォーリスなどー」(大鳥襄二名誉教授)
- * 第4回関西学院史研究月例会「はじめに女子学生ありき」(仲原晶子名誉教授)
- * 第7回関西学院歴史サロン「キリスト教主義教育の関西学院よ 何処へ」(武久堅文学部教授)
- * 第8回関西学院歴史サロン「関西学院と中国」(小玉新次郎名誉教授)

第20回関西学院歴史サロン

- * 『関西学院史紀要』第8号発刊
 - * 『学院史編纂室便り』No.15、No.16発刊
 - * 池田裕子副主査 北米に出張、ニュートン第3代院長に関する資料の調査・収集
 - * ホームカミングデーでの展示（於 関西学院会館）、テーマ「ベーツ先生と高商」
- 2003 3月 吉岡美国第2代院長没後55年を記念し、華開院（京都）で墓前礼拝（秘書室案内、ご令孫吉岡美和夫妻参列）
- 3月 松尾繁晴主幹定年退職
- 4月 比留井弘司主幹就任
- * 第5回関西学院史研究月例会「高商の盛衰とその背景」（安田長兵衛OB）
 - * 第6回関西学院史研究月例会「大学紛争で得たもの、失ったもの——職員の視点——」（山口恭平関西学院理事）
 - * 第7回関西学院史研究月例会「高等部における読書科の歩み」（宅間紘一高等部教諭）
 - * 第8回関西学院史研究月例会「J.C.C. ニュートン院長」（天川潤次郎名誉教授）
 - * 第9回関西学院史研究月例会「関西学院とハンセン病療養所」（長尾文雄元本学職員）
 - * 第9回関西学院歴史サロン「関西学院スポーツ史話～神戸・原田の森篇～」(米田満名誉教授)
 - * 『関西学院史紀要』第9号発刊
 - * ベーツ第4代院長の曾孫にあたるスコット・ベーツ氏から預かりの「ベーツ日記」の翻刻に着手（翌年7月末終了）
 - * 明治期における普通学部の学生が発行した手書き英文誌 *The Maya Arashi* を翻刻
 - * ホームカミングデーでの展示（於 関西学院会館）、テーマ「思い出は母校とともに～原田の森の宣教師たち」
 - * 「学院史編纂室便り」No.17、No.18発刊
- 2004 2月 『関西学院史紀要資料集Ⅰ 旌忠碑』（プレート起草委員会、学院史編纂室編）発刊
- * 第10回関西学院史研究月例会「E S S 部史から見た『英語の関学』」（神崎高明言語教育研究センター教授）
 - * 第11回関西学院史研究月例会「大正時代 関西学院の詩人たち—その光と影」（高橋夏男兵庫県現代詩協会常任理事）
 - * 第12回関西学院史研究月例会「高等部の現状と展望」（畑道也院長、高中部長）
 - * 第10回関西学院歴史サロン「大学紛争と大学改革」（田中敏弘名誉教授）
 - * 第11回関西学院歴史サロン「ウォルター・R・ランバスの人と思想」（山内一郎理事・名誉教授）
 - * 第12回関西学院歴史サロン「ピンソン著『ランバス伝』から見たウォルター・R・ランバス像」（半田一吉名誉教授）
 - * 第13回関西学院歴史サロン「ウォルター・R・ランバスの瀬戸内伝道圏構想」（神

田健次神学部教授)

- * 『関西学院史紀要』第10号発刊
- * 『学院史編纂室便り』No.19、No.20発刊
- * 北米のランバスゆかりの地とランバスファミリーの子孫を訪問する旅(学院首脳による実施)に、池田裕子副主査随行(ランバス大学などランバス資料所蔵大学アーカイブスとの交流、ノースカロライナ大学チャペルヒル校訪問、ニュートン資料調査)
- * 大学図書館・学院史編纂室共催「創立者ウォルター・ラッセル・ランバスのたどった足跡―生涯150周年を記念して―」展(大学図書館特別展示、10月8日～11月27日)および学術資料講演会「ウォルター・R・ランバスの瀬戸内伝道圏構想」(神田健次神学部教授、11月18日)
- * W・R・ランバス生涯150周年記念行事(大学主催)「ヴォーリズの『祈りのかたち』」展(於 時計台2階、10月8日～11月14日)
- * 小寺武四郎名誉教授遺族からの受講・講義ノート等の寄贈
- * 堀経夫名誉教授遺族・関係者から寄贈された受講・講義ノート、書簡等の大学図書館からの移管

2005 3月 山本栄一室長 退任 <任期途中>

4月 神田健次室長(神学部教授)就任 <在任 2006年3月まで>

4月 高橋正事務長転出、花田司事務長就任

11月 総合教育研究室主催「2005年総研プロジェクト週間」で「貴重資料の電子媒体」の研究成果の展示

- * 第13回関西学院史研究月例会「大熊氏廣『関西学院監督ランバス銅像』および『関西学院名誉院長吉岡美国銅像』をめぐって」(永田雄次郎文学部教授)
- * 第14回関西学院史研究月例会「今東光研究補遺―関西学院時代を中心として」(矢野隆司OB)
- * 第15回関西学院史研究月例会「韓国に於けるヴォーリズの働き」(神山美奈子 近江兄弟社中学校教諭)
- * 第16回関西学院史研究月例会「ランバス博士のブラジルでの足跡」(多田義治(財)日伯協会常任理事)
- * 第14回関西学院歴史サロン「第二代院長吉岡美国の生涯と敬神愛人」(井上琢智経済学部教授)
- * 第15回関西学院歴史サロン「ヒロシマ 平和運動と関西学院」(近藤絃子(財)チルドレン・アズ・ザ・ピースメーカーズ国際関係相談役)(キリスト教と文化研究センター共催)
- * ホームカミングデーでの展示(於 関西学院会館)、テーマ「学院英字新聞から見た『原田の森』の学生生活」
- * 『関西学院史紀要』第11号発刊
- * 『学院史編纂室便り』No.21、No.22発刊

2006 4月 辻学室長(商学部助教授)就任 <在任 2007年3月まで>

12月 総合教育研究室主催「2006年総研プロジェクト週間」で「貴重資料の電子媒体」の研究成果の展示(2年目)

第20回関西学院歴史サロン

- * 第17回関西学院史研究月例会「『矢内日記』に見る戦争と関西学院中学部」(池田忠詮 OB)
 - * 第18回関西学院史研究月例会「関西学院の歌—『空の翼』を中心に—」(綱干毅文学部教授)
 - * 第19回関西学院史研究月例会「カナダメソヂストを通じた、K Gと静岡英和の縁 幻の関西学院院長」(磯貝暁成初等部長予定者)
 - * 第20回関西学院史研究月例会「西灘村原田五百九拾番地に生を享けて—関西学院とともに歩んだ道—」(中條順子元本学職員)
 - * 第16回関西学院歴史サロン「日本の教育史のなかにおける関学奉安庫」(湯木洋一名誉教授)
 - * 第17回関西学院歴史サロン「Mastery for Serviceの光と陰」(宮原浩二郎社会学部教授、辻学商学部助教授)
 - * 院長研究プロジェクト神田健次主任研究員、創設者 W.R. ランバスの中国における足跡を調査(中国訪問)
 - * 池田裕子副主査、バスカム元宣教師夫人など3人の方々の所蔵資料の調査のため北米に出張
 - * 吉岡記念館ホームページ「関西学院を創った人たち」の作成協力
 - * 小磯記念美術館特別展「受贈記念 石坂春生展」に本学所蔵作品3点貸出
 - * 『関西学院史紀要』第12号発刊
 - * 『学院史編纂室便り』No.23、No.24発刊
 - * 「関西学院を育てた人—第2代院長吉岡美国」展(吉岡記念館主催、於 吉岡記念館)で展示品提供を含め協力、同展覧会をホームカミングデーでも開催
- 2007 3月 辻学室長 退任 <任期中途>
- 4月 永田雄次郎室長(文学部教授) 就任、学院史編纂室顧問に井上琢智(経済学部教授) 就任
- 4月 花田司事務長転出、比留井弘司事務長・桑代正一主幹就任
- * 第21回関西学院史研究月例会「関西学院とYMCA」(中道基夫神学部准教授)
 - * 第22回関西学院史研究月例会「関西学院上ヶ原キャンパス開設80周年」(田淵結文学部教授)
 - * 第23回関西学院史研究月例会「関西学院大学文学部心理学研究室85年史の編纂にあたって」(宮田洋名誉教授)
 - * 第18回関西学院歴史サロン「関西学院と宣教師の先生方」(宮田満雄名誉教授)
 - * 第19回関西学院歴史サロン「中国における W. R. ランバスの足跡を求めて」(神田健次神学部教授)
 - * 日本民家集落博物館(豊中市) 臨時企画展「鳥越憲三郎メモリアル—日本で初めて野外博物館を作った男」に資料提供
 - * 滋賀県立近代美術館「ウィリアム・メレル・ヴォーリス」展に資料提供
 - * 「全国大学史資料協議会」全国研究会(テーマ「創立期大学史資料の特色」)で池田裕子副主査が研究報告「関西学院創立初期の宣教師関係資料—北米での調査・資料収集からその活用まで—」
 - * 『関西学院史紀要』第13号発刊

- 2008 4月
- * 『学院史編纂室便り』No.25、No.26発刊
 - 大学博物館開設準備室開設 桑代正一主幹転出
 - * 『関西学院史紀要』第14号発刊
 - * 『学院史編纂室便り』No.27発刊
 - * 第24回関西学院史研究月例会「関西学院と讃美歌—特に由木康を中心に—」
(北村宗次元神戸栄光教会牧師)
 - * 第25回関西学院史研究月例会「上ヶ原移転後の教職員の住居—甲東園近隣を中心にして—」(磯由美子元松蔭中学・高等学校長)

総合コース・「関学」学 開講テーマ リスト(1995-2008)

学院史編纂室

| 年度 | 科目・コース名、副題 | 代表者 | 履修者数 |
|-------|--|----------------|------|
| 1995秋 | 総合コース 日本近代化と関西学院 | (代表) 畑 道也(文)教授 | 297 |
| 1996秋 | 総合コース 日本近代化と関西学院B —特に北米社会との関連で— | (代表) 山本栄一(経)教授 | 314 |
| 1997秋 | 総合コース 日本近代化と関西学院C —関西学院100年史を読む— | (代表) 山内一郎(神)教授 | 136 |
| 1998秋 | 総合コース 日本近代化と関西学院D —関西学院百年史を読む— | (代表) 平松一夫(商)教授 | 349 |
| 1999秋 | 総合コース 日本近代化と関西学院E —巣立った人びと— | (代表) 井上琢智(経)教授 | 606 |
| 2000秋 | 総合コース 日本近代化と関西学院F —学問の系譜— | (代表) 畑 道也(文)教授 | 203 |
| 2001秋 | 総合コース 日本近代化と関西学院G —関西学院111年に学ぶ— | (代表) 山本栄一(経)教授 | 297 |
| 2002秋 | 総合コース 日本近代化と関西学院H —関西学院111年に学ぶ— | (代表) 井上琢智(経)教授 | 222 |
| 2003秋 | 総合コース 日本近代化と関西学院I —学院の歴史に学ぶ— | (代表) 神田健次(神)教授 | 221 |
| 2004秋 | 「関学」学 関西学院学部史からみる 日本近・現代社会とのかかわり | (代表) 田淵 結(文)教授 | 570 |
| 2005秋 | 「関学」学 私学「関西学院大学」、 “耀く自由, Mastery for Service” からの個性 | (代表) 田淵 結(文)教授 | 593 |
| 2006秋 | 「関学」学 日本近代化と関西学院 | (代表) 神田健次(神)教授 | 505 |
| 2007秋 | 「関学」学 日本近代化と関西学院 | (代表) 神田健次(神)教授 | 621 |
| 2008秋 | 「関学」学 日本近代化と関西学院 | (代表) 井上琢智(経)教授 | 633 |

- ・副題は、「大学要覧」「年次報告」より
- ・履修者数は、教務課資料より